

# ブラックとイエロー

河口 龍夫 〈造形作家〉

私は与えられたスペースでの、ビエンナーレのための展示を再び開始した。電気のコンセントも私が指定した場所に三ヵ所用意された。展示に必要なすべての素材は、さまざまな努力の結果、ほとんど満足な状態にまで用意された。

私は毎日、パリ市立美術館に通いつめた。朝から夕方遅く迄制作に明暮する充実した毎日だった。とりわけ、日本での毎日のように、作品のまつたく売れない私は、創作活動以外に適当なところで働かなければならぬといつたことから、開放された喜びは大きかった。

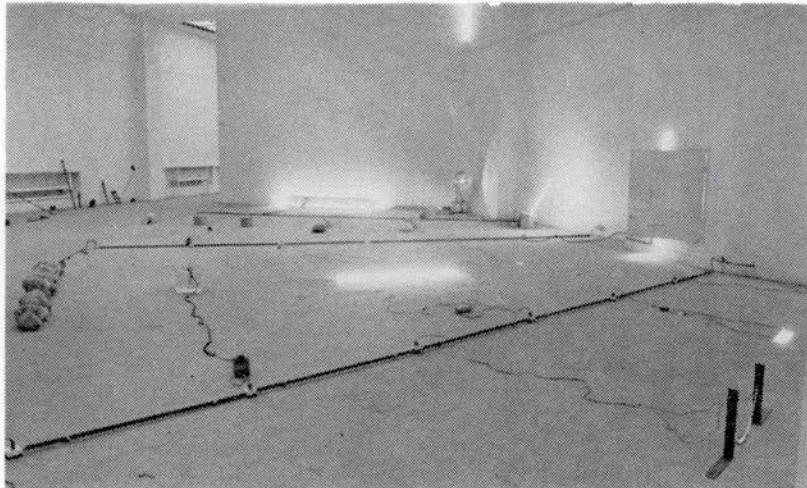
扇型に変形している私の展示場所は、展示を簡単にすませることを妨げた。何故なら、ほとんどどの美術館や画廊での床面での展示の経験が矩形のスペースであることが常であつたからだ。しかしながら、その扇形のスペースでも使い方によつては、或る種の良い効果をあげることは予想された。そのため、私はあらかじめ図面をひいて展示のさまざまなエレメントの配置場所を決定する方法は取らずに、徹頭徹尾その場所に於いて、あちらに置いたりこちらに置いたりして、その場所を私の身体で知ることに、そして、なじむことに努め

た。その方法は、大変時間のかかる遅々としてはかどらない方法ではあつたが、そのような方法で決定された作品自体の持つ場所性、あるいは臨場性は、ある必然的な自然性と意味をもつて、みずから置かれた場所に確固たる位置をしめた。

エネルギー（電気エネルギー）が、光のエネルギーに、熱のエネルギーに、あるいは運動のエネルギーに、変容する広大な「関係の場」あるいは「関係そのもの」が存在することに努められた。そして「関係－エネルギー」と題するその作品が関係と存在に対する私の思考の一種の集大成の一面をうかがえるものにならうとあつた。

ところで、現実の場に於いては、私が想像していたよりも、床から天井迄の高さがかなりあり、床面にはうように配置される作品の状態から想像しても、一層高く感じられた。また、展示部屋の壁面の中央より右よりにドアがあり、そのドアの中に火災のためであろうか、それとも掃除のためであろうか水道管と水道ホースが置かれていた。そのドアが視覚的にも大変邪魔に思われた。つまり、言い換えれば作品にとつて障害なのであつた。かりにそのドアを取り除いたとし

ても矩形の箱状の穴がほつかりと口を開くだけで  
あった。そこで色々とその点について熟考したあ  
げく、床面と天井の高さの問題に対しても、その  
解決として光のエネルギーによる作品を新たに用  
意し、問題のドアは、その当のドアも矩形の  
箱状の穴も、そつくりそのまま作品の中に組み込  
むことにきめた。そこで、具体的には天井面と壁  
面に沿って、部屋との関係がしめす九十度そのも  
のをネオン管にして作ることを、ドアの場所に  
は半開きにした状態で壁面の一部から垂直にそ  
の



〈関係—エネルギー〉

扇形のスペースに展開される〈関係の場〉右端の扉が問題の、そしてまた  
ブラックとイエローの友情にた感情を生んだ扉

矩形の窓み通りに型取り、そのまま、床面で水平  
になる状態そのものの形をネオン管にして取り着  
けることとした。それから、その場所以外ではい  
かなる意味も役も立たないネオン管を、その空間  
性をそえた青い色で発注することにした。そのネ  
オン管も通訳の正木氏の努力を得て、一日かか  
たとはいえ注文することができた。後はできあが  
る迄待つのみだ。

すべてのエレメントは周到な配慮でそれぞれの  
位置を占めた。熱、光、運動、音の場が出現する  
ばかりに配置された。それからは、そのそれぞれ  
の配置に従つて、配線をすればよいわけだ。しか  
しながら、その配線は多くの観客が会場内を自由  
に歩きまわつて見ても支障のないように厚いコン  
クリートの床にドリルで穴をあけ固定しなければ  
ならなかつた。しかも、電気工事なので、安全の  
ため素人の私がすることは禁止された。そのため  
、電気工事の専門の人夫の手がすぐのを待たな  
ければならなかつた。電気工事の頭領に何度も頼  
んでもなかなかやつてくれなかつた。

幸運にも、まるでブリューゲルの絵に出てくる  
ような黒人の人夫が、昼食の休み時間の間にやつ  
てくれた。フランスでは異例のことらしい。フラン  
ス語のしゃべれない私とフランス語以外の外国语  
のしゃべれない彼との、ブラックとイエローの  
手まねと眼を口ほどにものと言わせた奇妙な対話  
がなされた。それでもみようなもので、短かい期  
間ではあったが、友情にた感情が二人を支配し  
たようであつた。

電線の固定は彼によつて私の想い通りに完成さ  
れた。私は彼の名前を聞くことさえわざっていた  
が、全身で感謝の意を表わした。

# 神戸の女は日本一

## 神戸女のプロボーション

華房 良輔 〈放送作家〉

え・貝原 六一



いくら神戸に外人が多いといつても、混血でもない神戸女のプロボーションが良くなるわけでもあるまい、と仰言るむきもあるうけど、神戸女は脚のセンがきれいだし、脚は平均して長いようだし、バスト、ウエスト、ヒップのラインも、日本人離れしているように思う。

たしかに、神戸の女はスマートであります。これ、理由のないことではない。そして、外国人が多いことと無縁ではないのだ。

たとえば肉食の習慣。戦後、食生活が幾分かわつただけで、日本人の身長は伸び、脚が長くなつてゐるのだが、神戸っ子の食生活はずつと以前から、平均的日本人よりはるかに動物性タンパクの摂取量が多かつた。新鮮な魚も豊富だつたが、それがよりも神戸肉である。神戸っ子が日本で一番早く牛肉を食べはじめている。これ、外国人の居留のおかげで、慶応年間からその習慣がひろまつてゐる。さいわい但馬牛にはことかかぬ。

明治八年にはおどろくなれ、東京五百、大阪三百といわれる一ヶ月の牛の屠殺量が、比較にならないほど人口の少なかつた神戸でなんと、八百頭の屠殺をしている。

肉食が何代か続けば、体质は改善される。

加えて神戸は地方からの人口流入が少なかつたから、地方人の混合雑多のルツボとなることなく、神戸っ子が定着したのであろう。

ヨーロッパ人の脚がきれい、中国人の脚のセンがいい、いや朝鮮人の脚がいい、中近東の、アフ

リカの……なんのことはない、日本人以外はみんなそれぞれ、美しくあらせられるのだ。練馬の大根に比較されるような脚が、ほかの国で見当らぬというのは如何なることか。理由は簡単だ。畳の上で正座する習慣は日本だけのものだから、である。

神戸女の脚のセンがきれい、というのは、神戸女が行儀悪く、正座することがないからだ——というのではございません。

ご承知のごとく、神戸に居留する外国人は古くからたくさんいたが、明治の頃は永住者は少く、ほとんどが一時的な寄宿で、帰国するたびに洋風家具を一束三文で売りとばしていたのである。だから、神戸っ子は、椅子、ソファ、ベッドの生活にそれほど異和感をもたなかつたせいもあり、これらの家具を安く仕入れ、畳の上にジュウタンを敷き、脚掛けとベッドの生活をする者が多かったのだ。

これはヨーロッパかぶれの初代兵庫県知事伊藤俊輔（博文）の影響も少くない。

食住に洋風ムードが強まってくると、のこる衣着物姿というのは美しいものだが、着物に合う

体形というのは現代ではいただけない。いわゆるズンドウで、胸は平、柳腰といわれる垂れ下がつた尻、そして短い脚。これが、着物のおさまりがいいそうな。むろん、脚の太い細いは関係ない。

ところが、洋服を着るようになると、そうはいかぬ。スタイル、プロポーションに留意を払う。

体のセンにフィットしたチャイナ・ドレスを着る中國人が、体のセンを気にしたように。

女性が洋服を着はじめたのも、それがたちまち

普及したのも、神戸が筆頭。明治二十年には小磯吉人の提唱で、女性は束髪、洋装となり、当時神戸の靴屋では男靴より婦人靴のほうが売行きが多かったというから、その勢いの様がしのばれる。少々マユツバ的ではあるが、神戸女の脚がきれいという理由に、神戸は坂の街であるから、と説明できるような気がする。

神戸っ子は、どこへ行くにしろ、坂を登り下りせねばならぬ。これが、ヒップラインと脚線美を作りあげるのに、大いなる役割りを果たすのだぞうな。

勤めや学校への行き帰りだけでなく、神戸っ子は六甲、摩耶へ登る習慣がある。裏山登山は神戸名物のひとつだ。これまで、在留外人の影響で生まれたものだという。大正時代には徒步会が組織され、空前の隆盛をかもしている。

子供の頃から急な坂道を登る。爪足に力が入る。自然のおかげで、自然にヒップが強化され脚のタルミや脂肪がなくなる。足首もキュッとしまる。俗説によれば腔括筋もキュッとしまり強化されるのだそうな。

ぼく、こんどまた結婚する機会があれば、ぜつたい神戸っ子の女性から選ぶつもりだ。

ただ、聞くところによれば、神戸女はメンクイだとか。これが目下のところ心配のタネなので



華房良輔

MAKE UP WITH ROYAL

ニツ目・三ツ目の  
メガネにHOYA  
サンドライブ  
サングレイ  
サンブラウンを



神戸眼鏡院

元町店・元町3丁目 ☎(321)1212代表

三宮店・さんちかタウン ☎(391)1874-5

元町店は毎水曜日がお休みです

三宮店は第2、第3水曜日がお休みです



三宮店(元町大丸前)

装いも新たに三宮店がオープン  
いたしました。お気軽にご  
利用下さいませ。

ドイツ薬子  
Johneim's  
ユーハイム

本店 三宮生田神社前 TEL(331)1694

三宮店 元町大丸前 TEL(331)2101

さんちか店 三宮地下街スイーツタウン内 TEL(391)3539



# 自己主張のある余暇を

☆座談会／ファッショントレジャー

田中 国夫  
(関西学院大学教授・社会心理学研究室)  
山本 敏雄  
(兵庫県企画部文化局長)

藤田 敬一郎  
(神戸新聞コミュニケーションセンターチーフディレクター)  
妹尾 美智子  
(神戸市婦人団体協議会専務理事)

## ★なくなつたゆとり

藤田 企業では週休二日制に踏み切ったところが多いですが、ホンネは暇だからそうしているんですね。

妹尾 週休二日ということで休むとカッコいいですね。けど、ホンネは休んで貰つた方が助かるんですよ。

田中 若い連中には遊びは遊び、仕事は仕事という分離を割とハッキリとする向きが多くなつて来たようですね。妹尾 それはいえるでしょうね。けど、奥さま方は週休二日になつて音をあげてはいるでしょうね。遊び方なり余暇の過ごし方をみんなが知らないからですね。だから、一日位なら辛棒するけれど、二日もあるとこき使われて

いるわけですから、かえつて疲れる。余暇の使い方をみんなが知つたときは話は別ですが、今の平均的な家庭の状態では週休二日つてのはしんどいですよ。

山本 文化環境のベースは余暇なんですね。生活文化になつて来ると特にそうですね。

本誌が発刊当初から探究しつづけてきたものが、『神戸らしさ』の文化の発掘であった。文化を即生活とみると、神戸に住む人々のライフ・スタイルこそ、神戸文化である。この神戸らしさを、さらに色どり、楽しくしていくことは、まさに『文化開発』そのものではなかろうか。

『ファンション都市・神戸』はそのような環境のなかで息づいている。

そこで、ファンション都市・神戸の本質的な理解——神戸らしさの開発の一助にと、キャンペーンを繰りひろげることが、本シリーズの趣旨である。

今回は、余暇主導型の生活設計——余暇とは自分を発見する時間として、この時間で豊かな人生を色どるファンション・ライフを創り出しうる可能性——と神戸らしさを語る内容である。



山本 敏雄さん

余暇という字がそもそもいのじやないですか。余つた暇じやなくして人間にとって一番大切な時間だというより方をしていかないと。ゴロ寝をしたり休養しているのが当たり前のようになっているんですが、ほつほつ、休養じやなくてそれが人間生活のなかで最も大切なんだからもつと有効にという考えが出て来るのじやないです。仕事のなかに生きがいを感じる人は単純労働になるほど少ないわけですから、自由時間のなかで生きがいを感じることを考えないと、生きているという感じがないのじやないでしょか。自由時間の生きかし方を知らない人たちに対しても生き方もありますよということを指導するのも一つの行政じやないんでしょうか。

田中 仕事のなかで単純労働の場合は生きがいを感じら



田中 国夫さん

れない。だから、そのかわりに余暇のなかで生きがいを見出さうのは一つの論理ではあるけれど、本当にそうだろうか。単純労働であれ、そのなかに仕事の喜びが持てる者にして初めて遊びのなかにでも喜びが持てる。その両方に相関があるのじやないか。仕事が面白くない人は遊びも面白くない。というより面白くできない。そういうものじやないでしょか。

妹尾 日本人が御馳走を食べようとか、してあげましょ

うとかいうでしょ。あれはそもそも日本人の食生活が貧しい現われだという論があるんで。平素からとにかく飢えに足りたらいいという昔からの貧乏人根性がありますから、平素はお茶漬けサラサラで、時々御馳走しようと、人がいらっしゃるから御馳走しようじやないかということになるんですね。外国に行きますと毎日家庭で食べている食事もお客様が来たときの食事もそのベースはまったく変わらないわけですね。食事そのものが生活の楽しみ、喜びのなかに入り込んでいるから別に御馳走を食べに行ったり、御馳走しようという気もおこらない。

それと同じ感じから行きますと、改めて余暇を考えないと駄目だと、どうやつて余暇を楽しむかを考えようなんていうことはやっぱり働け働けという貧乏人根性の一つの現われじやないかという感じを持つわけです。

藤田 昔、近所のおじさんやおばさんが集まると、そのなかに歌舞伎の声色をするおばさんがいたり、小唄を歌うおじさんがいたりして、それは一つの文化だったと思うのですが、今頃、団地で集つても子供にピアノを習わせるお母さんは多勢いるけれど、お母さんがギター弾けるかというと弾けないし、お父さんが二部合唱できるかというと、できないし、そういう意味では文化不在でしょう。昔は貧乏だったけれどそんな文化はあった。今はそんな人ひとりもいない気がしますね。

山本 それはゆとりがあったからだと思うんですよ。お金がたくさんあるうとなかろうとゆとりはあった。ゆと



妹尾 美智子さん



藤田 敬一郎さん

★自己主張あつての余暇

藤田 一番大事なところはそこでしようね。

田中 ゆとりは何でなくなってしまったんだろう。

山本 日本人の勤労形態が原因でしょうね。特に戦後働くことに一生懸命になつて、お金さえたくさんになつたらということばかりを考えて来て、そこで置き忘れてきたのがゆとりじゃなかつたんだろうか。昔の人はお金も欲しかつたけれどももつた。私はそこへもう一度もどしてみたいという気なんですけどね。

妹尾 体験からいいますと暇はつくらないと出来ませんね。与えられて出来るものじゃありませんよ。

田中 自分の心の問題だな。

妹尾 あくまで心の問題だと思いますね。だから、ガツガツ働いてから遊んでやろうということがおかしいんですね。仕事以外のことに関心を持つとうという気になりまつたら、これを余暇といつていいのかどうか疑問ですね。ば。余暇だって仕事の一部みたいな感じになるんですよ。たとえ、ボツと時間が空いたとしてもその気にならなければ。

田中 ゆとりの心なんでものは忙しさの心、勤勉な遊びとひつついてると思うわけです。高度経済成長でみんな浮かれてしまつて、本当の暇、自分自身の本当の暇が欲しい、ゆとりのある遊びをしたいという意識がないときにはしつかり遊ばないと駄目じゃないかという声が出てきたわけですね。それがレジャー時代といわれた悲劇なんですね。

竹田洋太郎さんがいつていたように、レジャーにしろ、ファッショニにしろそれはあくまで自己主張なんですね。自己主張の気持ちが持てないとファッショニもレジャーもありませんよ。

妹尾 それは間違いないです。夢中になつて仕事をし続けて来て、ふと立ち止つたときにこれでいいんだろうか、自分といふものを出して行つたり、自分を見つけていかないと駄目じゃないのかという考えが、ひとつ遊んでやろうという意識に変つて来ていることは事実ですね。自己主張には色々な形がありますが、遊びという形の自己主張が出てきていると思うんです。

藤田 一人一人に自分が生きていると実感することは何ですかときいたときに、それがハッキリ答える人、つまり、オレは生きてるなあ、と思える時間を持つてゐる人は遊びがものすごくうまいし、仕事もテキパキと片づけていると思いますね。

レジャー時代に大型レジャーというものが花咲きました

たけれど、あれはあだ花のよう思えてね。そういう意味で、ファッショニも、時間が十分あります。ゆとりもできました、さあ、ファッショニ、ファッショニ……といい出したらファッショニのあだ花が咲くという気がするんですが……。忙しい中に充実した遊びを持つというのじゃなくて、遊びばかり考えるとか、ファッショニばかり考えるとか、あれかこれかみたいな発想にはどうもついて行かれないですね。

友だちのなかでも遊ぶのが面白いという連中は面白がる連中ですね。何にでも、これはすごいな、とすぐ驚ろくんですね。

田中

野次馬なんですね。

藤田 面白がる連中は余暇課や文化局が色々と情報を提

供しなくとも結構自分たちで面白がっているわけです。

山本 他人の遊ぶことまで放っておけという人が多かつたらいいんですね。ただ、働くことを苦にせずに、働くことがレジャーのような人たちはどうすればいいのか……。そんな人も忙しさから解放されないと本当に心が豈かにならないのじゃないかと思うんですけどね。

田中 ある本に書いてあつたんですが、人間には四つの型がありますと。テレビ人間、仕事人間、読書人間、遊び人間。

仕事人間の場合はどうなるかというと、自己主張といふか、自分といふものを大切にすることとはなじみがないままに育つて來たので、みんなが遊ぶときに一緒に遊んで來るんですね。遊ぶのも何でもみんなと一緒にやつて、私は自分で楽しむ、という自己主張はしにくいですね。

妹尾 遊びの楽しさを知らない方がたくさんいるんですね。特に昭和一桁は駄目ですね。遊びを楽しむ経験のない人たち、出来ない人たちがたくさんいるんですが、そういう人たちに遊びとは楽しいんだよと教えてあげる、感じさせてあげるのが文化局の仕事じゃないんですか。

藤田 都会で生活をしている女性は本気で遊ぶ気がある

のでしょうか。婦人グループがよく勉強をしているけれど、その仕方が果して自己主張になつてゐるのだろうか。余暇が目指すのが自己主張なら勉強をしているご婦人たちは本当にそのなかで自己主張ができるんですね。

うか。

妹尾 そのご婦人たちにとつては勉強をすることが遊びなんですよ。だから、逆にいうと、自己主張出来るよう

な勉強の場をつくらないと失敗しますね。

田中

レジャーの基本には自己主張、自分は自分で楽しむ、という根性がないと駄目だというわけでしょう。

それは、知つてゐる者同士だけで楽しむといふものじゃなく

てね。いつてみれば特殊主義と普遍主義とがあって、特殊主義というのは、知り合いの人とだけは楽しめる、抜擢する大切にする。顔と顔とのつながりを大切にする。

これが日本の社会の構成原理の根本ですね。反対に知らない者同士が絶えず気軽にあいさつを交わしたり、あつさりと仲良しになれる。そういうのが普遍主義なんですね。レジャーを本当に楽しむためには知らない者同士が大変スマートに楽しみ合える人間関係をつくらないと本当の意味でのレジャーなんか楽しめないですよ。

自己主張とまるで見知らぬ人とのスマートなつき合い

この二つができないと本当のレジャーを楽しむことはできないと思う。また、これが出来る市民が本当の市民

で、その可能性を持つてゐるのが神戸市民だということをいいたいわけです。神戸市民まで知つてゐる者同士だけが楽しんでいるようじゃ駄目ですよ。だからファッショニ

ョンにしても、ああ、あの人は長いスカートだ、じゃ私は短かいので行くわ、という位の意識がないと神戸は神戸らしくない。こういうことは、おっちょこちよいといふ神戸っ子の特質で行けるんと違うでしょかね。

藤田 文化局などでレジャーに関するプログラム、知らない人ばかりを常に集めるプログラム、計画的に知らぬ人がうまくつき合える技術を習得するようなプログラムを組まないと駄目だと思います。神戸に流入して来

る人は違った風土からいっぱい来るわけですから、そういう技術のない人が神戸に来た場合、神戸の風土に慣れてい負責るために計画的な訓練が必要になりますね。それが行政の仕事だと思いますね。

**妹尾** 政令指定都市の婦人団体でも、京都や大阪ではどこそここの奥さん、という格式がありまして、われわれのよくなおつちよこちよいが集つてワアーツとやるようなことは殆んど不可能に近い雰囲気ですね。神戸ならバレーボールでも、民踊でも、さあやろうとなると、みんなが寄つて来るんですね。

船員さんにも最終的には神戸で住みたいと願う人が多いんですね。こういう人々は世界各国の港を巡つて色々つき合いがあるわけですが、なぜかとくと、景色がいいということもあります、非常に気楽につき合える、ネットリしたものが多くて、サラッとしたつき合いができるというんですね。そういう特質が神戸にはあるんですね。

**田中** 早朝登山も本当に神戸らしい行事ですね。知らない者同士がぞろぞろ山へ登るわけですねえ。

**妹尾** うちの民謡の集いもそうですね。あれはうちの会員さんだけじゃなく誰でも参加出来るんですが、はじめは一日だったのが現在では四日になっています。そうしないと消化し切れないほど人が集つて来るのですが、それも初対面の人同士なんですね。それが結構楽しんでやっている。他の都市も真似しようとするわけだけど駄目だそうです。一日分も集まらないらしいですね。四百曲のうち、うちの関係は六十曲で、あとは和歌山とか沖縄などのグループがやつてているんですね（笑）。

**田中** これはアメリカでいえばミュージカルだね。色んな国から来た人がそこで国を越えてお互いに愛して行かなきやならない。仲よくなつて行こうという一つの熱望みたいなものが底辺にあって、アメリカのミュージカルのはやる原因になるわけですね。わが国の場合には民謡という形で熱気が集つて来ている感じですね。

★ファッショニも自己主張だ

**田中** 竹田洋太郎さんは、ファッショニが育つには、自己主張と社交界があり、さらに、音楽があること。そして職人さんが大事にされるまちであることが条件になるといつてましたが、京都の場合、スムースにファッショニがあるのは、社交界、つまり都おどりというものを見に行く人たちが存在するわけですね。そのへん神戸はどうなんだろう。それが神戸の経済の地盤沈下と関係して来るわけだね。

神戸は、都市計画にしても、何にしても役所がまず主導して行つてゐるわけですね。民間の資本が主体となって、自分の責任で自分でアクセントをつけてまちづくりをして行くということを命がけで——ひとつ失敗したらひっくり返つてしまふわけだから、やるということはないみたいですね。何とかセントーとか何とかプラザとか役所がつくるけれど、つくつたあとの運営はそこに入る専門店にまかせてしまう。それでうまく行くんでしょうかね。専門店にしても、最初から自分で資本を入れてあとあとまで頑張つてもうけて行くというのが希薄になるとこりに果してゆとりみたいなものが出て来るんだろうか。ゆとりのなかから、社交界というものが出て来るわけでしよう。

社交界といふと嫌味だけど、本当のレジャーは、芝居を見るにしても夜の八時半から始つて、というのは、それまでに食事をしたり身なりを整えたりして、それからゆっくりとみることなんですよ。それが本当のレジャーだと思いますね。私がアメリカにいたときは本当に楽しかつた。何故かといつたら八時半から始まりますね。そうすると、昼間はバミューダーをはいていた女の子なものがものすごくいい（笑）。

**藤田** あの華麗な变身というのはすごいですね。

**田中** それを含めての社交界というんですね。これが本

当の自己主張であるし、ゆとりであるんですね。

藤田 僕の場合、ファッショントイの着物ぐらいにしか見てないわけです。神戸のファッショント都市構想は知識としては頭のなかにあるんですが、実感としてはファッショントイの着せ替え人形的なものだと思っているわけです。ただ、着せ替え人形にするということは変身でしょ。人が変われるわけです。ファッショントンは変身だと思います。

だから、神戸のある場所に行ったら何らかの形で変身出来る。非常に洗練された人形になり切れるという場所を提供することが大事だと思うんです。それと、プログラムを提供すること。ファッショントンは変身から離れたら駄目だと思う。つまり、何かになり切れるということ。これがファッショントンの基本だと思います。

田中 変身できる場が欲しいですね。

妹尾 われわれがやっている消費者運動の立場からファッショント都市神戸を煮つめることができない問題になつて来ているのですが、そのときに、ファッショントンという言葉と、われわれがいう過剰機能の問題との接点をどう結びつけたらいいのだろうかと考えるわけです。

過剰機能つてものがどんどん指摘されて来るわけですね。こんなものはいらんのじゃないかとか、いや、それは主観の違いですよ、とかいうのが出て来るわけです。過剰機能とファッショントンとの関係を追求して行く段階に入つて来ているんです。ファッショント都市構想を家庭の主婦からみてどうやつてとらえて行くかがかなり考えられなければならない問題じゃないでしょうか。

それと、母親の立場からしますと子供に美しい心を育てて行く努力がファッショント都市構想のなかでわれわれに与えられた一つの役割分担じゃないかと思うんですね。ですから、大人の社会だけを考えるんじゃなくて、子供の心を育てて行くような、子供を一方では忘れずにいて欲しいなあということなんですよ。ファッショント都市というものを長い構想でみた場合、その下支えは何かと

いたら、母親だと思いますね。こちらが案外おきぎりにされている。私はそう感じますね。

藤田 確かにファッショント都市では、婦人の支えというものが大きいですね。

山本 ピアノとかお花とか琴とか、何々教室とか何々文化センターとか、勉強するところがありますでしょう。あのなかで九十九パーセントは女性ですね。だから、ファッショント都市という場合、さつき母親とおしゃつたけれど、女性を抜きにしては語れない。今のところ、お花の稽古なら花一の花の稽古しかない。そのなかから何か独自性みたいなものを出して行く、脱皮して行く何かが必要じゃないかとはいってんんですけどね。ファッショントンというのとは文化ですかね。

田中 ファッショント都市は、一つの情報産業都市だと私は理解しています。知的産業あるいは情報産業、つまりものにはハードな面だけではなくてソフトな面も一つの

値打ちだし、その値打ちを理解する都市だととらえているわけです。それと、色んな意味のアクセントがまちにかない駄目なわけです。神戸でも佐賀でも高松でも一緒だというんでは駄目だ。神戸にはこういう特色があるということを出して行って、しかも商店そのものにも非常にアクセントのあるものが出で来ないと駄目ですね。

だから、センター・プラザが出来るけれど、平均化したものが出来たんじゃ神戸には合わない。トーアロードとかあつちこつちのまちそのものなかで、サンチカはこうサンブルザはこうという、ただ単なるものだけを動かす、実用的機能というのだけじゃなく、情報の機能といいうものがいるわけですね。そういうアクセントが入らないことに駄目であつて、それにはやっぱり、専門店のみなさん頑張つて貰わないと。わしらの神戸は高松と違うんやと、どことも違うんやという意気込みで、自己主張をして貰いたいですね。そうしないとレジャーもファッショント都市もあつたものじゃないですよ。





市街地緑化の一環として市役所前にも色々と工夫がこらされている

株式会社 マキシン

渡辺 利武

生田区北長浜通二丁目八  
☎ 三三一一六七二一

デート株式会社

前田 新蔵

生田区三宮町二丁目八  
交通センタービル八階  
☎ 三九一一一一四九

有限会社

シンワ洋装店

岸野 利男

生田区三宮町二丁目一  
☎ 三三一一三〇九八  
さんちか店  
☎ 三九一一一五二五四

株式会社 サンサカエ

辻 光行

生田区元町通一丁目四八  
☎ 三三一一七八八五

株式会社 ウインザー

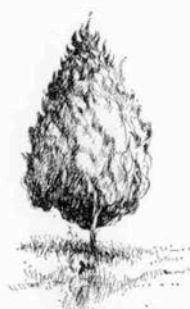
山田 六郎

生田区三宮町一丁目五の二  
☎ 三三一一七九五二

株式会社 アカシヤ

石井 省三

生田区三宮町二丁目三五  
☎ 三三一一二二三四



ファッショントリニティ神戸をめざして  
**グリーンコウベ作戦**  
5周年を迎える



「ファッショントリニティ神戸」にふさわしい環境づくりを――

神戸市は昭和46年度から「グリーンコウベ作戦」を始めた。これは緑がいっぱい住みよいまちづくりを目指すもので、神戸市全域の約7割を自然の緑地帯として保護し、市街地の3割を積極的に緑化していく構想であり①市街地の緑化、②背山の緑化、③団地などの緑化、④臨海地域の緑化の4項目を目標としている。

市街地の緑化では①幹線道路に中央分離帯を設置する、②歩道の単体街路樹を連続したグリーンベルトへ改造する、③街園やロータリーに緑をふやす、④河川沿線緑地帯を整備する、⑤街路樹の補植などに力を入れている。

また、新しい試みとしてフラワーロードに移動街路樹、移動分離帯も設置された。これは、神戸まつりのパレード時などに容易に取り外せるようにしたものである。これ以外にも「高中低木の混植方式」――植枠に1本づつ植えなくて色々な木をとりませて植える方法もとられている。

(参考) 兵庫県の木――クスノキ、神戸市民の花――アジサイ、神戸市民の木――サザンカ

# 街ぐるみで都市創りを

石坂 春生  
 いし はる  
 阪 おか  
 岡 ひつ  
 必 ぞう  
 三 くわ

（洋画家・新制作協会）

## ★ プラスアルファの楽しさを

稻岡 稲岡工業というのが明治42年の創業ですが、その前で播州木綿として江戸時代から木綿のほうをしていました。先々代ぐらいに、横浜に初めてタオルが入って来た時、これはいけるということで始めたのですが、日本では全く売れず中国に輸出、これが当ったのです。日本でタオルが始めたのは大正ぐらいからでしょうね。



石坂 春生 氏

それが稻岡工業です。カネボウベルエイシーというのは5年前にすべて生活産業はファッショニビジネスでないといけないというカネボウの社長がタオル部門をやることで稻岡工業と合併を組んだわけです。同時に私としても稻岡工業の新しいタオルのいき方として、タオルが生活の余裕というか、ただ水を拭けばいいというだけでなく、プラスアルファをのせて、タオルを使つて下さる人に豊かさとか美しさとかが与えられれば、と考えていたのです。生活必需品プラスアルファ、バブルームに一枚のタオルがあるだけでその家庭が何となくなごやかで、何となくファッショニになるというタオルが理想的なわけです。ベルエイシの経営感覚というのはタオルにはこういう柄があります。プレイボーイはこんなタオルです。森英恵はこんなタオルです。アメリカでは、ヨーロッパではこんなタオルです。というふうに我々はこれだけ用意しましたと情報を提供してお客様の美的センスで

いたいというカネボウの社長がタオル部門をやることで稻岡工業と合併を組んだわけです。同時に私としても稻岡工業の新しいタオルのいき方として、タオルが生活の余裕というか、ただ水を拭けばいいというだけでなく、プラスアルファをのせて、タオルを使つて下さる人に豊かさとか美しさとかが与えられれば、と考えていたのです。生活必需品プラスアルファ、バブルームに一枚のタオルがあるだけでその家庭が何となくなごやかで、何となくファッショニになるというタオルが理想的なわけです。ベルエイシの経営感覚というのはタオルにはこういう柄があります。プレイボーイはこんなタオルです。森英恵はこんなタオルです。アメリカでは、ヨーロッパではこんなタオルです。というふうに我々はこれだけ用意しましたと情報を提供してお客様の美的センスで

もつて好みのタオルを買って頂くということなのです。

石阪 何々酒店のタオルしか知らなかつた我々……(笑)

カラータオルが出た時すごいショックがありましたね。

そのへんからタオルが変質してきた。

稻岡 タオルは一番安く生活の豊かさを満喫できるの

です。そういうところまで生活に心くばりできるとい

うのがこれからの人間らしい生活になつてくるのでしょ

うね。タオルでおもしろいのは、百貨店によって全部上の

部がちがうのですね。雑貨部タオル課、呉服部タオル

課、寝具部タオル課、婦人服部タオル課、家具室内部タ

オル課、全部ちがうのです。その意味でうちはどの部門

とでも組めるわけですね。

石阪 それは興味ある話ですね。

湯殿とかトイレとかは、今まで日本人の生活のなかで  
は室内的ではなかつたのが、今、室内化しようとしている  
ところが私はおもしろいと思います。異人さんは昔から  
室内的なのです。それが日本に定着してきているよう  
ですね。

稻岡 日本人は混合民族時代みたいになつてしまして

ね。我々もどういう柄が当るかというのを見るのも大変な  
のです。フランス人そのもの  
のようないい日本人、黒人のよう  
な感覚の日本人もいる。そ  
うかと思えば若い人で浪花節の  
義理人情みたいな人もいます  
よ。



稻岡 昔の日本は、床の間があつて、それがあらゆる生  
活の余裕を表わし、床の間と飾り棚ぐらいが装飾の場所  
であつたのですね。

石阪 そこで勝負していた。また見栄をはつたり。あと  
の部分は室内ではなかつたのですね。台所とは女中さん  
が苛められているところ(笑)……情景的には全部そ  
うなものでしたね。

稻岡 絵画も床の間にかけるものであつて他のところに  
は掛けない。欧米では玄関にも階段の途中にも絵が掛け  
られ、あらゆるところがいわゆる室内的な場所として提  
供されているのですね。

石阪 たたみの上にじゅうたんを敷いて西洋家具があつ  
て、その反対側に和だんすがあり、その間にテレビを置  
いて、あの現実はたいへんなことですよ。どの民族にも  
ありませんよ。西洋文化がこれだけ怒濤の如く流れ込ん  
できた国ですからね。各個人で処理していかねばならな  
い時代がきたようですね。

稻岡 必三 氏 石阪 女の子もすごい個人差  
ですね。ユニークな人なんて  
言葉がありますが、一人一人  
と話しているとみんなユニー  
クですよ。今までユニー  
クさをかくすということが道  
徳みたいなところがありま  
したが、今はユニークなところ

をみせることが一つの知恵になつてゐるのです。企業の中でもユニークなことはかり話していると、あ

いつケッタイな奴、ということになる。(笑) そのケッタイな奴を経営者はオフリミットしていたけれど、経営者の考え方も変化してきて、そんな人間に優秀な点を見い出せるようになつてきていますね。

### ★ネゴシエーションの知恵

稻岡 アメリカ人は混合民族で、その混合民族を監督する知恵があるので、Negotiation(根回し)のやり方を教える先生がいっぱいいるのです。日本でもそれは必要だと思いますね。日本では部下は命令を出せば聞くものだということで、どうすれば人が動くかということは考へないので、アメリカ人はそれは考へませんね。管理者はいかに仕事をさせてペイさせるかを考えます。どうすれば人が動くかと考えるのがアメリカ経営学です。

石阪 混合民族として苦労してきた民族なので、その苦労の結果人間関係は根回ししかないという知恵であります。

稻岡 一つの命令を上司として出す時にある程度の根回しをしておくのです。教育の専門家が企業訓練をするとき、論理的なデーターを揃えたりして根回しのやり方を教えるわけです。各々が個性があつて孤立してくる社会になるとそれなりの根回しの仕方がありますね。そういう知恵というのがあります必要でしょうね。部下も上司に自分の思うことをやつてもらうには根回しをすればいいのです。そうすると平社員でも会社を動かせるわけでよ。課長を根回し、部長を根回し、そして社長を根回しして、自分の思うことを会社の方針にしてしまえばいいわけですね。管理者とて根回しを忘れて命令したら絶反撃を食う場合もあるのです。日本人も今や、そのアメリカ経営学を習わないといけませんね。

### ★街ぐるみで都市創りを

稻岡 神戸市がファッショングループ都市化をいいます。急に神戸市民の意識を統一化することが大切ですね。神戸市はファッショングループ都市としてしか生きる道はないのだ

と一種の根回しをするのですよ。

石阪 ファッショングループ都市化のキャンペーンでトップが花火を打ち上げているだけではだめなんです。それで市民が疎外感を感じてくるようになつたりすると危いです。よので、だからその方向へ皆が協力していこう。といふふうにもつていかなければなりませんね。その点は京都市民は上手ですね。

神戸市も空港、あるいは空港との連絡口が必要だと思います。ファッショングループ都市として不可欠でしょう。ハイカラな街、神戸をつくるのに昔は港が果した役割が大きかったのです。ヨーロッパファッショングループ、アメリカ文化化、そういうものの中継地点の形で神戸から日本へ広げていくという役割をするのが昔の港、今の空港ですよ。そして、道路一本にしても街を走る車のカラーヒトツにしても美しくシステム化した都市ができれば、国際的にも神戸に行くと素晴らしい街になる。その一つのカラーボリュームが決まれば、タクシーも市バスも新しく建てるビルも応援してもらって、街ぐるみで神戸らしい街づくりをしていくようにするわけです。それにはファンシーナンリーダーというのが必要ですね。

石阪 ディレクター。どういうサイドにも通じたディレクター。あまりに専門的でも困りますね。何々的にプロフェッショナルであると、そつちに走つてしまふので街づくりにならないような気がしますね。

稻岡 全市民的な協力が実る方向と、いうのが一番望ましいですね。多くの人へ来て頂いても気持ちよく歓待できる街ないと神戸は生きられないですね。